

# 創造性と協同性を重視した幼児の表現遊び

——音楽づくりへのつながりを視野に入れた4歳児の実践から——

坂井 康子・佐野 仁美<sup>1</sup>・岡林 典子<sup>2</sup>

Expressive Play for Young Children Focusing on Creativity and Cooperation:  
A Study of Teaching Practice for Four-Year-Old Children Centering on  
Connecting to Music-Making

SAKAI Yasuko, SANO Hitomi and OKABAYASHI Noriko

**Abstract:** In recent years, various new attempts have been made around expressive activities for young children. In this context, the authors have developed expressive activity programs that emphasize creativity and cooperation while considering the period of early childhood as an important time for developing a solid foundation. In this paper, we discuss expressive play for 4-year-old children with a focus on connecting the practice to elementary school curriculum. As a result, it was found that with appropriate subject matter and instruction, creative and cooperative activities that enable students to acquire the basic elements of music are possible for 4-year-old children.

**Key Words:** Creativity, cooperation, expressive play, music making, onomatopoeia

**要旨:** 近年、幼児期の表現領域の活動については様々な新しい試みがなされている。そうした中で筆者らは、幼児期を素地形成の重要な時期としてとらえ、創造性と協同性を重視した表現活動プログラムを開発してきた。本稿では、小学校で学ぶことへのつながりを視野に入れた4歳児の表現遊びについて考察した。その結果、適切な題材と指導によって、音楽の要素を体得することができる創造的かつ協働的な活動が4歳児で可能であることを明らかにした。

**キーワード:** 創造性, 協調性, 表現遊び, 音楽づくり, オノマトペ

## 1. 研究の背景

現在は国際情勢の変化やAI（人工知能）の進化等、目まぐるしい変化が見られ、既存の枠組みや価値観では対応できない問題が起っている。AI技術の発展により、これまで人間が担ってきた仕事がAIやロボットに置き換えられつつある。しかしながら、「人工知能がどれだけ進化し思考できるようになったとしても、その思考の目的を与えたり、目的のよさ・正しさ・美しさを判断したりできるのは人間の最も大きな強み<sup>1)</sup>」であるとして、『小学校学習指導要領 第1章 総則』第1「小学校教育の基本と教育課程の役割」2(2)には「豊かな心や創造性の涵養を目指した教育の充実」が謳われている。また、「学習指導要領改訂の方向性」として「発達段階に応じた、新たな発見や科学的な思考力の源泉となる創造性を育む<sup>2)</sup>」ことがあげられている。かつては演奏面に偏り

<sup>1</sup> 京都橘大学

<sup>2</sup> 京都女子大学

がちであった音楽教育においても、自発的な創造性を育む活動そのものである「音楽づくり」の分野の研究が進んできている。また音楽の演奏においても「創造性」が必要であることは言うまでもない。筆者らは、創造性は小学校に上がってから養われるものではなく、幼児期からその素地を育むことが重要であると考えている。ちなみに、『幼稚園教育要領』第3「教育課程の役割と編成等」5(1)には、「幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにする」と記されている<sup>3)</sup>。

また、発達心理学およびその隣接分野では、早期から協同性の基盤的能力のあることが確認されている。乳児には生後9か月頃に、他者と世界を共有するための基礎的機構である「共同注意」の飛躍的な発達が認められ、この社会的能力が協同性の基盤能力であることが指摘されている (Tomasello 1999)。筆者らの研究においてめざす「協同性」に関しては、「幼稚園教育要領」領域「人間関係」の「内容」に協同性に関わる文言が多く見られ<sup>4)</sup>、「内容の取扱い」にも「(3) 幼児が互いにかかわりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること。」と「楽しさ」「喜び」の文言を含めて明示されている。しかし領域「表現」においては、協同性に関して「内容」に「(3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。」<sup>5)</sup>とのみ記されている。領域「表現」においては、今回の改訂で「他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。」<sup>6)</sup>が「内容の取扱い」に追加されたが、「自己表現を楽しめる」ことを目標とすることが領域「表現」における限界なのであろうか。

## 2. 研究の経緯

本研究に先立ち、本稿に至るまでの我々の研究、および関連する研究について触れておく。

筆者らは、幼稚園や子ども園の保育者の協力のもとこれまで10年以上継続して、創造性と協同性を培うことができる様々な表現遊びのプログラムを開発してきた。岡林の「幼小の接続と協同性をテーマとした研究」<sup>7)</sup>と佐野の「表現遊びから音楽づくりへつながる創造性を重視した研究」<sup>8)</sup>を複合的に実現するべく、実践を繰り返しては修正を加え、体系化したプログラムを構築しようとしてきた。坂井は、子どもの音声についての音響的分析をおこなうなどにより、岡林・佐野による研究を根拠のあるものとするために基礎研究を積み重ねてきた<sup>9)</sup>。

我々の研究は、「幼少期から自国の音・音楽、および日本語に基づく表現を感得・体得する」という考え方と方法論を基盤としている。小学校学習指導要領では、「我国や郷土の音楽」に関する学習の充実が図られ、和楽器が中学年の旋律楽器に加えられたが、我国や郷土の音感覚は、幼児期からの一連の活動を通して育まれるものではないだろうか。筆者らは、幼児期からわらべうたや地域の祭り囃子に用いられる和楽器に親しむ、囃子づくりに発展させる等、素地形成からの活動に連続性を持たせることの重要性を感じている。これらは日本的な音感を重視した創作活動を生み出す基礎の育成にも寄与するものである。また、急速に国際化が進む現在、将来を担う子どもたちにとって自国の文化に親しむことによるアイデンティティの構築に繋がることも期待できる。

筆者らはこれまで共同研究を進める中で、日本の子どもの音楽的素地を育成するためには、日本語、かけ声、オノマトペ、和楽器などを用いた系統性のある音楽活動プログラムが必要であることを見出した。そして、具体的な指導案を考案し、幼稚園と小学校での実践を繰り返して検討を重ねてきた<sup>10)</sup>。

本研究と関連する研究としては、坪能ら(2005)等の一連の研究があげられ、援助者の演奏に対する幼児の自発的な関わりや、音楽ゲームを幼児に行った結果を分析している。しかし、日常的な子どもの表現活動において、音楽づくりの素地を育むプログラムは、まだ考案されていない。

音楽づくりの実践については、小島ら(2014)があり、日本民謡やわらべうたに基礎を置く音楽づくりの実践が記されている。

本研究ではこれらを踏まえつつ、幼児期から日本人の音感覚を重視し、創造性と協同性を育むプログラムの体系化を目指す試みの一つとして実施した。

題材としては、絵本『たいこ』(樋勝 2019)を用い、絵本のオノマトペを表現遊びの中で音楽的に展開するプログラムを考案した。本稿では、この4歳児を対象とした実践を分析し、筆者らの目的とする保育内容における

創造性と協同性が素地形成の基盤の中で実現しているかを検討し、考察する。

### 3. 実践について

#### 3.1 実践の目的と方法

小学校低学年の教科書には、言葉や打楽器を用いてリズムをつくる音楽づくりの教材が掲載されている。たとえば、「たん」と「うん」というようなリズムを表す定番の言葉でつくる教材<sup>11)</sup>だけでなく、「とんとんとん◇」「ざあざあざあ◇」のように、いろいろなオノマトベをもとにリズムをつくり、それを楽器で打ってみるような教材も見られる<sup>12)</sup>。このように、音色をイメージしやすく、繰り返しを伴うことが多いオノマトベとリズム、打楽器は結びつきやすい。

その一方で、幼児の表現は、抽象的な音のみを扱うというよりは総合的なものである。幼児は絵の色や形を見てイメージしたものを言葉で唱えたり、身体を使って表現したりする。いわば、体全体を使って、リズムを表現しようとするのである。そのような子どもにとって、視覚と保育者の読み聞かせによる聴覚のどちらにも働きかける「絵本」はたいへん身近な教材である。本研究では、リズムを主題とした絵本を用いて実践を行い、音楽を形づくっているどのような要素をもとに子どもたちの表現が耕されていったのかを考えることが目的である。

研究方法としては、事前に保育者と綿密な打ち合わせを行った上で、実践を参観して3方向から録画し、筆記により実践の様子を記録した。実践終了後には、保育者にインタビューをおこない、実践に至るまでの子どもたちの様子などを聞き取った。

#### 3.2 教材について

教材として取り上げた絵本『たいこ』（樋勝 2019, 図1）は、ほとんどの部分が「トン」「ポコ」「ペタ」「ボン」「ガオー」「ゴン」のようなオノマトベで構成されている。登場キャラクターの一人が「トン トン トントン」と演奏していると、「なかまに いれて」と他の登場キャラクターが演奏に加わり、そのたびに「トン トン ポコ ポコ」「トン トン ポコ ポコ ペタ ペタ」「トン トン ポコ ポコ ペタ ペタ ボン ボン」とオノマトベの種類が増えていき、2回ずつの繰り返しが「トン ポコ ペタ ボン」のように1回ずつに変化し、リズムカルに演奏を楽しんでいる姿が描かれる。絵とともに、オノマトベの文字が大きくなったり、太字になったり、字の配列が斜めになったりして（図2）、人数が増えて熱中していくことが視覚的に想像できる。

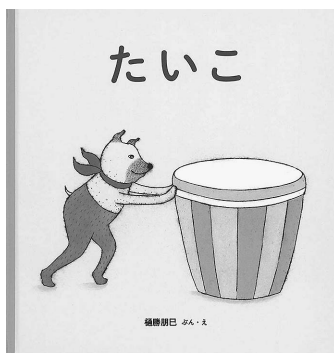


図1 『たいこ』表紙

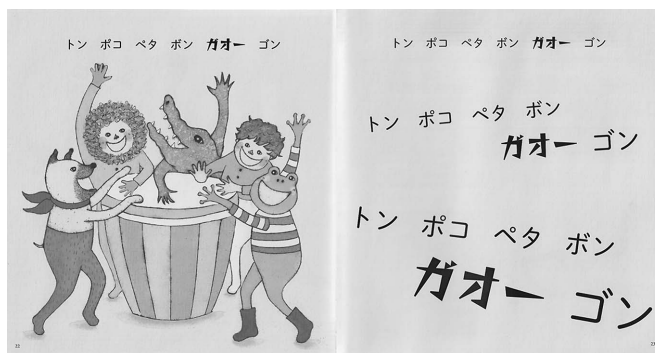


図2 『たいこ』22, 23 ページ

そこに突然ワニがやってきて皆が追い出されたり、また一緒に演奏して盛り上がった様子などが、ほとんど絵とオノマトベの文字の大きさと配置で表現されているのだが、状況がたいへん分かりやすい。友達が仲間に入ってきたり、一人になったりする場面は、子どもの遊びの中でもしばしば見られる。子どもたちは容易に登場キャラクターの気持ちになって、友だちと一緒に声を合わせたり、身体をたたいたりすることができると思われる。

#### 3.3 実践の手続きと子どもたちの様子

2021年11月19日10:00~10:15にT子ども園保育室において、4歳児1クラス（男児15名、女児12名、

計27名)の実践を行った。保育者は約1カ月前から『たいこ』の読み聞かせを行い、実践までに子どもたちは自然に「トン トン トントン…」と絵本のオノマトペを唱えながら自分の身体をたたき、登場キャラクターになりきって楽しむようになっていた。また保育者によると、ままごと遊びの中で突然、リズムを口ずさんで友だち同士でのトントン、ポコポコなどの表現が出てきたこともあり、オノマトペごとに身体をたたき場所が異なって、次第に子どもたちの中でそれが決まっていっていったという(トンがひざ、ポコがあたま、ベタがおなか、ドンが両足で床を踏む、ボンはおしり、ガオーは頭を前に突き出しながら手をワニの手のようにして前に出す)。子どもたちはオノマトペの語感からそれぞれの登場キャラクターをイメージして表現していたことが窺える。

その後、登場キャラクターごとに分かれて、椅子を太鼓に見立てて叩きながら絵本を楽しむ活動へと遊びを広げていった。子どもたちは、登場キャラクターに「いぬ」「モジャ」「かえる」「ハリハリ」と名前を付けて、愛着を持ってそれらを呼んでおり、一通り役をやってみてどの役もやってみたいようだったが、最終的にやりたい役を自身で選んだ。表現したい役のペンダントを制作し、さらに登場キャラクターになりきって遊ぶようになっていった。その一方で、ワニの「ガオガオさん」は保育者の役と思っている様子で、子どもたちは保育者とのやり取りを楽しむ姿も見られていた。

表1に実践のねらいと主な内容を記した。最初に、「トン トン ポコ ポコ」のような保育者の絵本の読み聞かせの音声に合わせて、子どもたちはオノマトペごとに順にひざや頭、お尻を打ったり、手拍子、足拍子をとったりして楽しんだ。「なかまに いれて」「いいよ」の台詞では全員で言葉を掛け合っていた。保育者はゆっくりとしたテンポで始め、文字の大きさや斜めの配置、熱中している登場キャラクターの絵に合わせて、速度を上げ、強弱、高低も変化させていき、盛り上がりの最後には皆で声をそろえることを楽しんでいた。ワニの登場後には、「ガオー」という言葉を間に挟みながら、最後は立ち上がってポーズを決めた。自然に絵本の字の大きさを大きくしたりして、絵本の字の大きさを忠実に表現した。子どもたちも繰り返す箇所は盛り上がっていった。

次に、子どもたちはペンダントをつけた登場キャラクターごとに分れ、その役になりきってオノマトペの発声とともに、椅子の座面をたたいた。子どもたちは保育者の指示の下、拍にのってタイミングを合わせて自分の役のオノマトペを発声して椅子をたたき、「なかまに いれて」「いいよ」の台詞では保育者と掛け合った。保育者の音声に触発されて、ゆっくりと静かな表現からテンポを上げてだんだんと強い表現になり、最後には立ち上がり、全員で声を合わせてポーズを決めた。

表1 実践のねらいと主な内容

ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>○絵本『たいこ』のオノマトペを口ずさみ、言葉のリズムや表現を楽しむ。</li> <li>○絵本『たいこ』のリズミカルな言葉や、たいこをたたき表現を自分の身体を使って楽しむ。</li> <li>○登場キャラクターに分かれて、椅子をたたいて絵本の世界を表現して楽しむ。</li> </ul>
主な内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>①絵本『たいこ』の読み聞かせをする。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・保育者の周りに集まり、自分の身体をたたきながら絵本の言葉やオノマトペを口ずさむ。</li> <li>・自由に表現を楽しむ。</li> </ul> </li> <li>②椅子を太鼓に見立てて、絵本『たいこ』の世界を楽しむ。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・役ごとに集まり、自分の役のオノマトペを口ずさみながら、椅子をたたき。</li> <li>・自由に表現を楽しむ。</li> </ul> </li> </ul>

#### 4. 実践の表現の特徴と音楽性

『たいこ』の各ページのオノマトペの特徴と今回の実践により、どのような音楽的要素を子どもたちに感得させることができたか、指導した保育士の音声の特徴と照らしながら示す。

絵本の各ページについてビデオから書き起こし(表1の主な内容の①の部分)、「音声のまとめ」と「声の特徴」を記述した(表2)。勢いよく発声したため絵本より回数が多いオノマトペもある。

表2 実践の音声の書き起こしとその「音声のまとまり」および「声の特徴」

絵本のページ	保育者	子どもたち	拍のまとまり, 声の特徴
	本見えますか?大丈夫ですか?	はーい。	
	ではみんなで。たいこ。	たいこ。	
2, 3 ページ	トントントトン トントントトン トントントトン なかまにいらて。	トントントトン トントントトン トントントトン なかまにいらて。 いーよー。	トントントトンで4拍のまとまり。
4, 5 ページ	トントンポコポコ トントンポコポコ トンポコトンポコなかまにいらてー。	トントンポコポコ トントンポコポコ トンポコトンポコなかまにいらてー いーよー。	それぞれ4拍のまとまり。
6, 7 ページ	トントンポコポコベタベタ トンポコベ タ トンポコベタ なかまにいらてー。	トントンポコポコベタベタ トンポコベ タ トンポコベタ なかまにいらてー。 いーよー。	6拍のあと3拍のまとまり。
8, 9 ページ	トントンポコポコベタベタボンボン トントンポコポコベタベタボンボン トントンポコポコベタベタボンボン トントンポコポコベタベタボンボン トントンポコポコベタベタボンボン	トンポコベタトンポコベタボンボン トントンポコポコベタベタボンボン トントンポコポコベタベタボンボン	8拍のまとまり。小さく始まり 徐々に声を強める。
10, 11 ページ	トンポコベタドン トンポコベタドン トンポコベタドン トンポコベタドン トンポコベタドン トンポコベタドン トントンポコポコベタベタポーーン	トンポコベタドン トンポコベタドン トンポコベタドン トンポコベタドン トンポコベタドン トンポコベタドン トントンポコポコベタベタポーーン	4拍のまとまり。徐々に声を強め て早くなる。
11, 12 ページ	うるさいぞー, ガオーー	うるさいぞー, ガオーー	威圧的で強く。
14, 15 ページ	ゴン ゴン	ゴン	躊躇して小さく。
16, 17 ページ	ゴンゴンゴンガオ ゴンゴンゴンガオ ゴンガオ ゴンガオ ゴンゴンガオー ゴンゴンガオーー	ゴンゴンゴンガオ ゴンゴンゴンガオ ゴンガオ ゴンガオ ゴンゴンガオー ゴンゴンガオーー	4拍のまとまり。小さく始まり次 第に強く。
18, 19 ページ	トン□ゴン□トン□ゴン□トントンゴン □トントンゴンガオ	トン□ゴン□トン□ゴン□トントンゴン □トントンゴンガオ	トンは高くゴンは低く。4拍のか たまり。間をあけて, 小さく。
20, 21 ページ	トン□ゴン□ボン□トンゴンボン□トン ゴンボンガオー	トン□ゴン□ボン□トンゴンボン□トン ゴンボンガオ	間をあけて。
22, 23 ページ	トンポコベタゴンガオゴン トンポコベ タゴンガオゴン トンポコベタゴンガオ ゴン トンポコベタゴンガオゴン トン ポコベタゴンガオゴー	トンポコベタゴンガオゴン トンポコベ タゴンガオゴン トンポコベタゴンガオ ゴン トンポコベタゴンガオゴン トン ポコベタゴンガオゴー	6拍のまとまり。非常に速く次第 に強く。
	いいよ立って。	立っていいん?	
24 ページ	ガオガオガオフォー ガオガオガオフォー	力強く開放的に。	

## 5. 考 察

### 5.1 前半の実践①について

小学校学習指導要領では、音楽を特徴づけている要素として、「音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、和音のひびき、音階、調、拍、フレーズなど」を、音楽の仕組みとして「反復、呼びかけと答え、変化、音楽の縦と横との関係など」をあげている。この度の実践では『たいこ』の言葉（文字）にすでに音色（字体を変えて音色の変化を促している）、リズム（言葉のリズムが様々な形で表現されている）、速度（文字の大きさや間隔、向き、絵の表現で速度がわかる）、強弱（字体と文字のフォントで強弱がわかる）、拍（4拍、6拍、3拍、8拍のまとまりを織り交ぜている）、反復（オノマトペが繰り返されている）、よびかけと答え（「なかまにいらて」

「いいよ」), 変化(同じオノマトベでなく太鼓のリズムを感じさせる変化がある)に関わる音楽性が見いだせる。

また指導者の音声の特徴として、音色(すべてのオノマトベの音色を変えている)、リズム(絵本のリズム感を最大限に発揮している)、速度(加速度的に早めるなど工夫している)旋律(トンは高く、ボンは低く発声するなど、広い声域で発声している)、強弱(小さく始まり加速度的に強める、躊躇する時は小さくなど工夫している)、拍(言葉の特徴に合わせて拍を調節している)、フレーズ(間の開け方が非常に快い)、反復(勢いをつけるために反復を増やすなど工夫している)、変化(すべての部分で音楽的要素が変化している)において豊かな表現がみられる。

## 5.2 後半の実践②について

ここでは、表1②のたいこをたたく(イスの座面をたたく)実践の部分に関して、四つの点について考察する。

第一に、子どもたちは保育者の音声に合わせて、拍にのった表現ができていた。最初はぎこちなかった子どもたちの動きが、慣れてくるとイス、カエル役など五つに分かれて順番にタイミングよく声を合わせて楽しんでいった。オノマトベによって保育者の音声は、自然に4拍子が3拍子になったり、また1拍が半分の長さになったりしていたが、子どもたちはそれに反応して、自然な形で拍子の変化を楽しんでいた。これを導いたのは、絵本のオノマトベと保育者の音声と言えらる。

第二に、子どもたちの表現には、速度や強弱の変化が見られた。これもやはり、保育者の音声に導かれて、その変化を楽しむことができたと言えらる。「トン ポコ ペタ ボン」というオノマトベを保育者がテンポよく、声の高さを変えて表現したことにより、子どもたちも声の高さを変え、テンポを速めて切迫感を出して盛り上げようとしたり、ゆっくり弱くたたいたり、場面に合わせて音楽も変化するのを楽しんでいた。

第三に、「なかまに いれて」「いいよ」や「トントン ゴン」「ガオ」などの掛け合いが見られたことである。最初は全員と一緒に楽しんでしたが、各自の役に分かれてからの表現では、保育者との掛け合いやグループごとの掛け合いが見られ、無意識のうちに「呼びかけとこたえ」という音楽の仕組みが実感できたことと思われる。

第四に、最後の仲間と声やポーズを合わせる表現は、声を合わせる楽しさとともに、音の重なりへの関心に結びつくと考えらる。

## 6. 結 び

絵本『たいこ』をもとにした表現遊びが気に入った子どもたちの思いが継続して、2022年2月の生活発表会においては、この4歳児クラス全員で、カスタネットを用いて絵本の表現遊びが行われた。実践前から絵本『たいこ』で遊んでいた期間を入れると、この表現遊びは3か月以上、子どもたちの心をとらえ続けた。全員がカスタネットという同じ楽器であったものの、生活発表会で子どもたちは、声の高さを変えてオノマトベを唱えることにより様々な音をイメージして楽器を打ち、登場キャラクターになりきって仲間に入ったり追い出されたり、最後には一緒に演奏して楽しむ姿が見られた。

以上のように、この絵本を用いた表現遊びは、音や様子などを表すオノマトベからリズムを創って楽器で打ってみるという小学校1年生の教材の前段階として位置づけることが可能であろう。それだけでなく、絵本の登場キャラクターになりきって演奏することにより、友だちと音を合わせる楽しさを自然に感じる協同性を育むことにもつながると思われる。

幼稚園教育要領解説<sup>13)</sup>には、「5歳児の後半になると、-中略- 感じたことや考えたことを必要なものを選んで自分で表現したり、友達と工夫して創造的な活動を繰り返したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりして、意欲をもつようになる。」とある。本研究の子どもたちは、創造的協同的に生き生きと表現し、「意欲」のみならず実行力を持って遊びを生み出している。もちろんそれは、適切な題材と指導があって実現していると考えらる。本研究により、4歳児で、創造的協同的な表現が可能であり、音楽の諸要素を楽しみながら体得することができることが明らかになった。

## 【謝辞】

本研究の遂行にご協力いただきました、たちばな大路子ども園の難波和子園長、佐伯真実副園長、永金里英先生に感謝申し上げます。

## 【付記】

本研究は、JSPS 科研費 JP21K02478, JP17K04889 の助成を受けている。

本稿は、筆者ら3名で細かく執筆分担し、坂井が全体を校閲している。

## 【注】

- 1) 文部科学省 2017『小学校学習指導要領解説 総則編』p.1
- 2) 文部科学省初等中等教育局教育課程課「初等中等教育における創造性の涵養と知的財産の意義の理解に向けて 第3回 検証・評価・企画委員会（産業財産権分野会合）」資料, 2018年2月5日
- 3) 『幼稚園教育要領』第3「教育課程の役割と編成等」5(2)
- 4) 『幼稚園教育要領』第2章「ねらい及び内容」p.4（「人間関係」2内容（1）（5）（7）（8））
- 5) 『幼稚園教育要領』第2章「ねらい及び内容」p.9（「表現」2内容（3））
- 6) 『幼稚園教育要領』第2章「ねらい及び内容」p.9（「表現」3内容の取扱い（3））
- 7) 「幼小連携をふまえた音楽教育プログラムの開発」科研課題番号：25381279（研究代表者）／「協同性の育ちに着目した幼小接続における音楽教育のプログラム開発」科研課題番号：17K04889（研究代表者）
- 8) 「表現遊びから音楽づくり、創作へと体系化された音楽教育プログラムの開発」科研課題番号：21K02478（研究代表者）
- 9) 「保育士・教員養成における歌唱教育に資する子どもの自発的歌唱に関する研究」科研課題番号：25381104（研究代表者）／「保育士・教員養成における音声・歌唱教育に資する乳幼児音声の分析的研究」科研課題番号：22530891（研究代表者）／「『声・ことば・うた』の音響的・韻律的分析に基づく保育・教育の表現活動の研究」科研課題番号：17K04655（研究代表者）
- 10) 岡林他（2017, 2018, 2019, 2021 a, 2021 b）、佐野他（2016, 2017, 2018）、坂井（2016）、坂井他（2016, 2017, 2022）、山野他（2018）など
- 11) 新実徳英監修 2020『おんがくのおくりもの1』教育出版, pp.20-21
- 12) 新実徳英監修 2020『おんがくのおくりもの1』教育出版, pp.24-25
- 13) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』p.67

## 【引用文献】

- Tomasello Michael 1999 The cultural origins of human cognition. Harvard university press.
- 岡林典子・佐野仁美・坂井康子ほか 2018「領域『表現』と小学校音楽科をつなぐ音遊びの可能性－『マラカス作り』によるオノマトベ表現と協同性の成り立ちに着目して」『京都女子大学発達教育学部紀要』14, pp.115-124
- 岡林典子・佐野仁美・坂井康子ほか 2019「領域『表現』と小学校音楽科をつなぐ和楽器を用いた活動の試み」『京都女子大学発達教育学部紀要』15, pp.109-119
- 岡林典子・佐野仁美・坂井康子 2021 a「和楽器を用いた表現活動において育まれる力－幼稚園年中児のオノマトベ表現に着目して－」『関西楽理研究』38, pp.21-38
- 岡林典子・佐野仁美・坂井康子ほか 2021 b「幼小をつなぐ音楽教育のプログラム開発－『祇園囃子』を教材として－」『京都女子大学発達教育学部紀要』17, pp.143-152
- 岡林典子・難波正明・山崎菜央・深澤素子ほか 2017「幼小をつなぐ音楽活動の可能性（4）－絵本を用いた『表現遊び』から『音楽づくり』へ－」『京都女子大学発達教育学部紀要』13, pp.73-83
- 小島律子・関西音楽教育実践学研究会編 2014『生活感情を表現するうたづくり－理論と実践』黎明書房
- 坂井康子 2016「乳幼児の歌唱様音声の韻律的・音響的特徴」日本赤ちゃん学会『ベビーサイエンス』15, pp.46-63
- 坂井康子・岡林典子・佐野仁美 2017「0.1.2歳の自発的な音声表現から小学校の音楽づくりへ」日本音楽教育学会『音楽実践ジャーナル』第15号, pp.85-94
- 坂井康子・志村洋子・山根直人・岡林典子 2016「乳幼児の歌唱様音声の音響的特徴」『甲南女子大学研究紀要』52, pp.45-50
- 坂井康子・中野武史・志村洋子 2022「養育者との相互交渉における乳幼児のオノマトベ音声の音響的特徴」『甲南女子大学研究紀要 I』58, pp.129-136
- 佐野仁美・岡林典子 2019「オノマトベを用いたリズム創作の可能性－協同性に着目して－」『京都橘大学研究紀要』45, pp.83-95
- 佐野仁美・岡林典子・坂井康子 2016「『音楽づくり』へつなげる幼児の表現遊び－絵本を用いた実践をもとに－」『関西楽理研究』33, pp.15-31
- 佐野仁美・岡林典子・坂井康子他 2017「音楽づくりへつながる幼児の表現遊び－絵本のオノマトベを用いた実践から－」『関西楽理研究』34, pp.23-42

- 坪能由紀子・木村充子・見附美香 2005 「幼児の創造的な音楽活動の開発に関する研究－幼児の音楽活動の変容の分析・解釈を通して－」『日本女子大学大学院紀要, 家政学研究科・人間生活学研究科』11, pp.225-233
- 樋勝朋巳 2019 『たいこ』福音館書店
- 山野てるひ・岡林典子・水戸部修治編著 2018 『幼・保・小で役立つ 絵本から広がる表現教育のアイデア』一藝社